

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

三島村立大里小中学校

1 研究のねらい

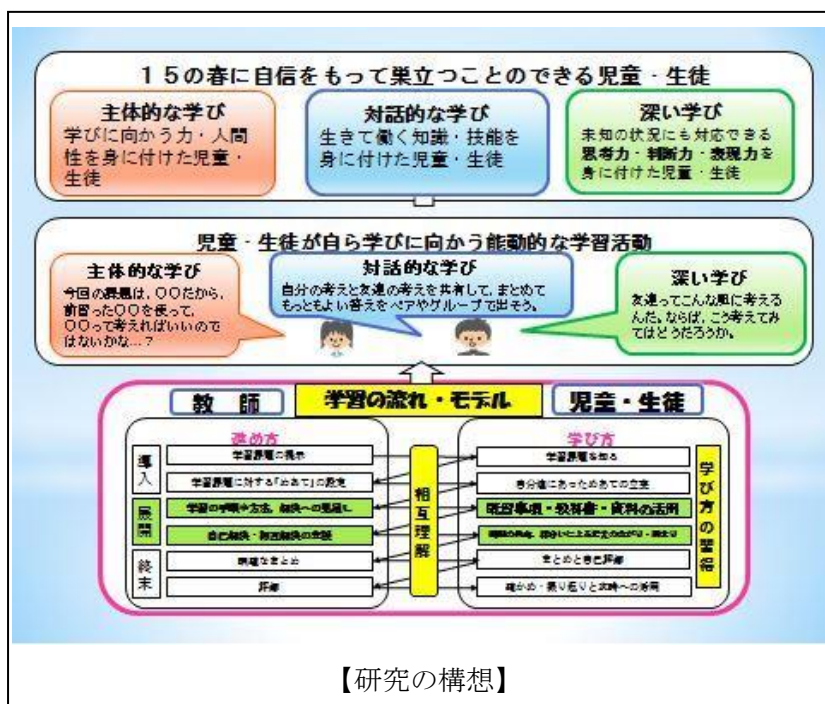
本校は、極小規模校で、小学1年生から中学3年生までが同じ校舎で学ぶ小中併設校である。令和元年度の在籍数は、児童数10名、生徒数6名の計16名、そのうち7名が「しおかぜ留学生」である。教師の目が一人一人に行き届く「極小規模校の利点」を生かし、個に応じたきめ細やかな指導を行うことができる反面、「自ら学びに向かう能動的な学習活動」が展開されていないことが課題であった。そこで、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を研修テーマに掲げ、「見通しを持って主体的に学習に臨み、対話を通して考えを広げ深められる授業のあり方」について研究を進めていくことにした。

2 研究の概要

1年目は、教師がプランニングする「学習モデル」＝「一単位時間・単元全体の学習の流れ・各過程における「学び方」を示したもの」を相互理解した授業の実践、2年目は、日々の授業を通して、児童生徒自身に「各過程における学び方」を習得させる研究を進めてきた。しかし、対話的な活動で得られる「多様な見方・考え方」を、相互に関連付けてより深く理解したり、自ら新たな課題を見出して解決策を考えたりする「深い学び」の実現には至らなかった。そこで、3年目となる今年度は、「深い学びへつなげる学習活動の在り方はどうあれば良いか」に重点をおき、研究を進めてきた。

3 研究の内容

- (1) 見通しを持ち、自ら学びに向かうための工夫
- (2) 対話を通して、考えを広げ、深めさせるための工夫
 - 自分の考えを明確に持たせるための工夫
 - 考えを交流し、広げ、深めるための工夫
- (3) 相互に関連付け、深い学びへつなげるための工夫



4 研究の実践

- (1) 見通しを持ち、自ら学びに向かうための工夫
 - ア 「学習モデル」＝「一単位時間の学習の流れ・各過程の学び方」の掲示
 - イ 課題解決的なめあての設定
 - ウ 既習事項の掲示
 - エ 問題場面の提示の工夫



(2) 対話を通して、考えを広げさせるための工夫

【自分の考えを明確に持たせるための工夫】

- ア ヒントコーナーの設置
- イ ギャラリーウォークの活用
- ウ 学習の足跡の残るノート・カードの活用
- エ 前年度の児童生徒の作品提示
(モデルとしての活用)

【考えを交流し、広げ・深めるための工夫】

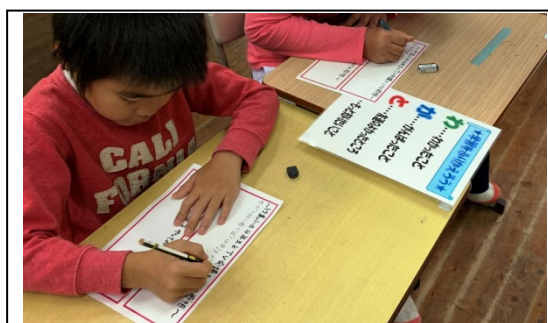
- ア 考えを伝える方法の多様化
(ホワイトボード・ヒントカードへの直接記入・ロイロノートによる共有化)
- イ 話合いの視点の明確化
- ウ ICT機器を活用しての比較(自分と友達、自分と自分)
- エ 学習形態の工夫(ペア・グループ・達成目標の類似による意図的グループ)
- オ 教師による「ゆさぶり」発問

(3) 相互に関連付け、深い学びへつなげるための工夫

- ア 「めあて」と「まとめ」の一体化
- イ 自分一人で「まとめ」を再構築し、考えを深化させる時間の確保
- ウ 振り返る視点「わがとも」の明確化



【ロイロノートによる考えの共有】



【「わがとも」による振り返り】

- わ・・・分かったこと
- が・・・がんばったこと
- と・・・ともだちの良かったところ
- も・・・もっとがんばりたいこと

5 研究のまとめ

(1) 成果

- 学習モデルを各教科で実践することで、見通しを持って学習に臨むことができていた。複式・単式学級に関わらず、主体的に学びに向かう姿が見られた。
- 自分の考えを明確に持たせる工夫を行うことで、対話的な活動が活発になったり、考えやものの見方を広げ、深めたりすることにも繋げることができた。
- ICT機器を効果的に活用することで、自分と友達や自分と自分を比較したり、考えを共有したりすることができていた。また、学習の足跡をICT機器に保存しておくことで、学習後の変容を捉えやすいという利点もあった。
- 自分を振り返る視点を明確に持たせることで、児童生徒自身に、自分の変容を実感させることができた。

(2) 課題

- 自分の思いや考えを伝えたり、対話で得られた多様な考えを、自分一人の力でまとめ、言葉で表現したりする力を育てていく必要がある。

6 今後の取組

本年度までの研究で得られた課題をもとに、小・中学部で連携を図り、「表現力育成のための指導の在り方」について、研究を進めていく予定である。

- 「表現スキル」(自分の思いや考えを図式や文章で表現できる)の育成
- 発達段階に応じた「対話活動のスキル」の育成